

美術館におけるアーカイブの位置と可能性

川口雅子（国立西洋美術館研究員）

近年、わが国の美術館においても公開型の図書室を設置する例が増えており、またインターネット上で美術図書館横断検索システムの公開が実現するなど、文献入手の利便性は向上した。しかし美術研究で必要とされるのは、図書や雑誌といった文献資料だけではない。スケッチ・ブックや日記、書簡等の狭義のアーカイブズをはじめ、新聞の切抜きや小冊子、一枚物の資料、写真なども学芸員の調査研究に欠かせない貴重な情報資源である。散逸しやすい性質から「エフェメラ」（一過性資料）とも呼ばれるこれらの資料も含めて、重要性を正しく評価し、保存・管理して研究者の求めに応じて公開していくアーカイブの仕事を美術館機能の一つとして位置づけることが必要である。

美術館のアーカイブを実現していく上で重要なのは、継続的に取り組む長期的視点と戦略を持つことである。国立西洋美術館学芸課には情報資料を専門に担当する部署があるが、図書や雑誌、作品情報の蓄積と公開が活動の中心で、美術館アーカイブの構築に正面から取り組む人的・時間的余裕が十分にあるわけではない。そこで現体制で実行可能な計画として「アーティスト・ファイル」の整備に着手している。中世末期から20世紀初頭にいたる西洋美術の作家を切り口にエフェメラの収集・整理が目下進行中である。

計画の着手に際しては、先行事例として、ニューヨーク近代美術館やナショナル・アート・ライブラリー（ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館）など欧米の主要美術図書館で採用されている手法をモデルとした。それは、アーティスト・ファイルも図書や雑誌とともに蔵書目録（OPAC）で検索可能にするというもので、資料の種別を問わない統合的アクセスを利点とする。このような手法を採用できた背景には、図書館の国際的標準に則って図書整理を行い、図書整理のためにすでに図書館システムを導入していたことがある。

さらに等閑にしてならないのが、美術館自体が記録資料を生み出す現場でもある、という点である。従来、学芸員が管理してきた作品資料もその文脈で捉え直すことが可能であろうし、その意味ではこれまでの美術作品「デジタルアーカイブ」には美術館における資料のあり方そのものを問う視点が欠けていた。デジタル画像が充実していても作品の複製であることに変わりはなく、これのみを提供しても美術研究の要請を満たすわけではない。デジタル・アナログの媒体の別を問わず、作品関連の資料をしかるべき公開条件のもとで研究者の利用に供するには、学芸課・庶務課などの部門の垣根を越えて、作品受入記録や写真、展覧会カタログ（展覧会歴）、掲載誌（文献歴）を包括する資料管理体制を確立する必要がある。

今後、アーカイブをめぐるさまざまな試みを実行に移し、軌道に乗せることができれば、結果として日本国内に所蔵される西洋美術作品の情報が豊富に蓄積され、国内の文化財情報の拠点の一つとなることにもつながるであろう。それを通じて、西洋美術史の研究環境をめぐり欠落を埋める一助となれば幸いであると考えます。